

太鼓門

この印象的な門は、城の二の丸に入るための主要な門であった。三の丸を囲む土塁を突破した攻撃者には、外堀とこの太鼓門が致命的なネックとなる。

太鼓門は広場の両端に二つの入口がある。これは米の量を計る枡形にちなんで枡形門と呼ばれる。外側の門を破った敵は、より大きな内側の門を突破しようとするために枡形内を横切らなければならなかった。その間、城壁や門番は弓や火縄銃で攻撃することができた。

太鼓門の名は、かつてこの広場の北側の壁にあった太鼓楼に由来する。太鼓楼には太鼓と鐘があり、時刻を知らせていた。緊急時には警鐘を鳴らすこともできたし、戦いの喧噪の中で叫び声が聞こえない守備隊に、太鼓のパターンを変えて合図を伝えることもできた。

この門のもう一つの特徴は、内側の入り口付近の壁の一部を構成している巨大な岩である。これは、松本城二代目城主・石川康長（1554-1643）から名がつけられた高さ 4m、重さ 22.5t の巨石「玄蕃石」である。伝説によると、石川康長は、山から城まで引きずられる石の上に乗っていたそうだ。ある運搬人が文句を言ったときには、石川は飛び降りて、その男の首を切り落とし、槍の先に突き刺したそうである。石川は石に登り、その槍を高く掲げて、「さあ、出発だ」と叫んだ。

太鼓門は、大天守のすぐ後 16 世紀末に建てられた。1871 年に城の外郭とともに取り壊されたが、1999 年に 18 世紀初頭の絵図をもとに再建された。西側の石垣の一部（玄蕃石を含む）はそのまま残されている。元の石積みは、石垣の下部を形成する黒っぽい部分で見分けることができる。

赤松の切り株

この大きな切り株は、1999 年に完成した太鼓門の復元工事で使用された樹齢 140 年の赤松 2 本のものだ。門の屋根を頭上で支える横木として使用された。

旧柱礎石

この石は、太鼓門の柱を支えていた元来の礎石の一つである。門の取り壊しの際、最後の松本城主に仕えた商人、飯森家に一対が贈られた。飯森家はそのうちの 1 個を自邸で使用していたが、1973 年に「城の歴史として保存してほしい」との願いを込めて市に返還した。